

## 歴史探訪 Part II - ⑰

江戸川木材工業株式会社

顧問 清水 太郎

前々回、前回と鉄道唱歌と共に、新橋－名古屋－神戸まで東海道線を探訪して参りました。未だ心地良い旋律が聴覚の奥に残っております。

今回は「リニア新幹線 品川－相模原－甲府－飯田－名古屋－大阪まで開通(2045年?)の暁にはどのような日本になっているのか」について展望します。

我々同年代の仲間うちでは、「2020東京五輪を冥土の土産に」が合い言葉になっておりましたが、東京五輪と新年号が射程圏内に入った昨年の年賀状には「リニアに乗ろう」と書いて寄越した人も出て参りました。

去る2月15日、ある会合で明大公共政策大学院の市川宏雄先生による「東京の今後の展望と未来戦略」～東京が目指すべき都市像とは～とのテーマで講演がありました。

私は1963年、大学工学部を卒業後、某大手ゼネコンに入社、2年目に1964東京五輪を体験しました。太平洋戦争で父を亡くしましたが、日本は1945年敗戦以来、廃墟の中から立ち上がり、20年足らずで、復興した日本を世界に向かって誇示する絶好の機会となりました。昭和天皇の開会宣言、選手達の入場行進、自衛隊機によって空に描かれた五輪の輪。競技については、鬼の大松に率いられた東洋の魔女といわれた女子バレーの金メダル、ローマ大会に続いて2連覇したエチオピアのアベベ、競技場内で英国選手に抜かれ銅メダルに輝いた円谷、お家芸といわれた柔道無差別級でヘーシンク(仏)に敗れ銀メダルに終わった日本の神永、などが強く印象に残っております。

東海道新幹線は開通し、首都高速は羽田から環状線と初台までがようやく開通しました。

私は当時、都内で地下鉄工事に携っておりました。その後3年間勤務し、国土の改造に貢献したことを今でも誇りに思っております。

その後高度成長が続き、1970年大阪万博を経て、世界NO.2の経済大国となり、3つの神話(①経済は限りなく成長する ②地価は高騰する ③銀行はつぶれない)も生まれました。2度のオイルショックを克服した日本経済もバブル崩壊と共に低迷し、一時38,000円のピークを記録した株価は急降下し、20,000円を割り、これに少子高齢化が追い打ちをかけました。2000年ミレニアムに向ってようやく回復が見えたと思いきや、阪神淡路大震災に見舞われ、中越地震、7年後東日本大震災があり、今はその復興途上にあります。東京五輪まであと2年。希望に満ち溢れた時代は来るのでしょうか。ところで何故リニア新幹線を作らねばならないのでしょうか。

森ビルはじめ頭脳集団が分析した分野別都市総合ランキングによりますと、①ロンドン ②ニューヨーク ③東京 ④パリ ⑤シンガポール ⑥ソウル ⑦アムステルダム ⑧ベルリン ⑨ホンコン ⑩シドニー の順になっております。東京はパリにテロ事件が勃発するまではNO.4でありました。世界と競っており上位を目指すというよりも⑤シンガポール ⑥ソウル等に追い上げられ肉薄しておりますので、追い抜かれない為に、是非東京－大阪間をリニアで結び、6千万人という全人口の半数が住

むエリアから東京まで60分で到達できるようにしなければなりません。

他に、空港までのアクセス、海外からの訪問者2020年に4千万人。文化等、環境整備、経済等をUPさせなければならない、ということ学びました。私は何一つ貢献することは出来ませんが、若い世代に委ね、陰ながら成功を祈るのみであります。

去る3月27日、東海道ネットワークの会21例会がありました。

「奥三河の戦国時代の遺跡を巡る」とのテーマで、東は川口、西は名古屋から15名の仲間が豊橋駅に10時に集合しました。時間の制約がある為、日本三大稲荷の一、豊川稲荷は無念の思いで割愛し、バスは一路新城市の鳳来寺山頂(標高684m)に鎮座する煙巖山鳳来寺に向います。今春爛漫の桜の開花期で、山道に満開の桜を愛でながら、さしたる渋滞もなく快適なペースで山頂に到達しました。当山は大宝2年(702年)利修仙人によって開かれました。鎌倉幕府を開いた源頼朝が平治の乱で敗れて落ち延び、僧坊に3年間匿われました。徳川家康の生母於大の方が、この寺に参籠したことで家康を授かり、後に三代将軍家光は神君誕生ゆかりの地として慶安3年(1650年)鳳来寺東照宮を建立、1,350石が与えられました。

井伊直政は幼少の頃、今川氏に追われこの寺に7年間匿われておりました。本来は杉並木の中を1,425段の階段を上がり、仁王門(国重文)をくぐって、仏法僧の声を聴きながら本堂に到着するのですが、今日は有料道路を使って近くまで上ることが出来ます。それでも最後の急坂と階段はかなりハードで食事前の高齢者にはほど良い鍛錬となりました。

昼食が終って外へ出ますとそこは長篠城址でありました。地元のガイド氏3名が待機されており、素晴らしいチームワークで我々を戦国時代たけなわの世界に誘って下さいました。

長篠・設楽原しだらがはらの戦は、信玄没後2年にして、後継者勝頼と3人の天下人、信長、家康、秀吉が新兵器火縄銃の効力を遺憾なく発揮させ、戦国の世を方向付ける戦いでありました。

天正3年(1575年)武田勝頼は1万5千人の軍を率いて長篠城を囲みました。徳川方の城主奥平貞昌は、5百人の城兵と共にこれをよく防ぎ持ちこたえておりました。武田軍は長篠城の野牛門を猛攻し、食糧庫を破壊しました。

弾正曲輪も落ち、籠城戦は不可能となり、奥平貞昌は岡崎城へ落城寸前を告げる使者を募りました。ここで鳥居強右衛門と鈴木金七郎の2人が名乗り出ました。

不浄口から脱出した鳥居強右衛門は豊川を泳いで下り、川路の広瀬で上陸し、(雁峰山)で脱出成功合のろし図の狼煙を挙げ、岡崎城の家康の元へ伝令として走りました。鳥居は信長や家康と面会し、翌日にも織田徳川軍が長篠城救援に出陣することを知らされました。

鳥居はこの知らせを一刻も早く長篠城に伝えと引き返しますが、早朝武田の兵に捕まりました。武田軍は鳥居を磔はりつけにし城の前に立たせ、「援軍は来ない。諦めて城を明け渡せ」と叫ぶよう強制し、聞き入れれば命を助けると約束しました。

鳥居は「俺は使いに出された鳥居強右衛門だ。敵に捕まりこの姿になったが、あと2、3日で数万の大軍が来るぞ」と叫びました。

鳥居はその場で突き殺されましたが、城兵の士気は上がり、辛じて死守し、織田徳川連合軍が駆けつけて城は守られました。

長篠設楽原の戦い 天正3年5月18日、織田信長軍3万人、徳川家康軍8千人は長篠城の手前設楽原

に着陣しました。一方、武田勝頼軍は長篠城の牽制のために3千人、残りの1万2千人が設楽原に向かいました。

織田徳川連合軍は、連吾川を堀に見立てて川を挟む台地の両側の斜面を削り急斜面として、土塁に馬防柵を設けるといふ異例の野戦築城を行いました。無防備に近い鉄砲隊を主力にする為、柵と土塁で守って武田の騎馬隊を迎え撃つ戦術を建てました。柵は三重とも二重ともいわれておりますが、雁峰山の麓から豊川に至るまで約2kmにわたり、短時間で築くことが出来き、これが勝敗を分けたともいわれております。信長家康連合軍は極楽寺山に本陣を置き、軍議を開き、鉄砲3千挺と馬防柵を用意し、武田軍をおびき寄せ壊滅させました。

今も設楽原には馬防柵が再現されております。ここを見学後、長篠城史跡保存館で当時の火縄銃の遺品等を見学しました。

武田勝頼の長篠戦については、多くの部下が諫めたにも拘わらず、一気に勝負を決めようと、設楽原に駒を進めました。

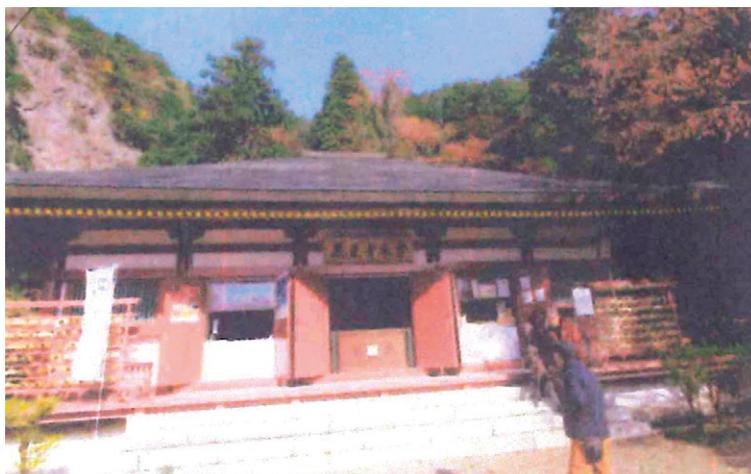
勝頼の母は諏訪氏の出で、本流でなかったこともあり、ここで主導権を握り一気に天下を目指そうと焦りがあったのではないのでしょうか。

都合で信玄塚へは行けませんでした。設楽原の激戦地に村から避難していた農民が戻ると、連吾川や弾正山の麓に名も判らぬ武者の死骸が散乱しておりました。村人たちはここに大きな穴を掘り亡骸を埋葬し、松の木を植えて弔いました。

当時すでに信玄は没しておりましたが、信玄公の威名が武田勢の代名詞であったことが伺われます。

今でも、風林火山の旗指物や、「甲斐の山々日に映えて・・・」で始まる三橋美智也が唄う「武田節」は人の心を打つものがあります。

私が以前お世話になった某住宅メーカーは、社員の志気を鼓舞する為、事ある毎に唱和しておりました。



鳳来寺本堂